数詞ヨン・ナナ・キューの固有名詞への浸透について
―地名、小字名、姓における四・七・九―

城　岡　啓　二

０．はじめに
１．ヨン・ナナ・キューの浸透以前の地名
２．ヨン・ナナ・キューへの地名の変化
３．新しく命名された地名の場合
４．小字名の四・七・九
５．姓の場合の四・七・九
６．言語変化の諸傾向
７．明治 22 年の合併地名からシチとナナの関係
８．シからヨンへの変化やシチからナナへの変化は訓読み化か？
９．固有名詞とヨン・ナナ・キュー（要約）

０．はじめに

数字としてのヨンという言い方が始まったのは明治時代であるし[1]、もともと和語などとともに使われたナナが守備範囲を広げ、シチの領域にまで浸透し始めたのも明治期であった。また、キュー（本稿では、引用の場合を除いて、長音符による表記を使うことにする）については、「九州」や「九死一生」のような言い方では「九」は明治期においてもキューであり、おそらく明治以前からの読み方だっただろう。しかし、数字の「九」は明治期において基本的にはクと発音された。キューが数詞として普及し出したのも明治期においてであったと考えられる。現代においては、数字をイチから数える場合には、慣用的な言い方を使っているようで、イチ・ニー・サン・シー・ゴー・ロク・シチ・ハチ・クー・ジューと言うことが今だに多いと思われるが、逆順に 10 から 1 にカウントダウンするときには慣用的な言い方ではなく、今日の標準的な数詞が使われ、キュー・ナナ・ヨンが出てくるようである。『NHK ことばのハンドブック』で数字単独の場合の基準となる発音としてヨン・ナナ・キューをあげ、シ・シチ・

クの方は容認発音としているのがそのへんの事情も考慮してのことだろうか。現代日本語の基本数詞がヨン・ナナ・キューの方であることは、助数詞との組み合わせでシ・シチ・クが衰退傾向にある点でも確認できる。ハンドブックでは13ページほどの助数詞との組み合わせの表が掲載されるが、この中でシ・シチ・クが使えるものは多くない。

① シ：四月

② シチ：七回忌、七月、七行、七号、七字、七時、七時間、七時限、七周年、七帖、七台、七題、七段（段位）、七段（階段など）、七度、七度（回数）、七度目、七人、七人前、七年、七杯、七敗、七版、（第）七番（音楽以外）、七尾（ビ）、七分（フン）、七遍（ヘン）、七ポイント、七枚、七幕、七名、七問、七夜（ヤ）、七羽、七割

③ ク：九月、九時、九時間、九次元、九時限、九尺、九条、九帖、九畳、九寸、九台、九たび（度）、九段（段位）、九段（階段など）、九度、九度目、九人、九人前、九年、（第）九番、九分（ブ）、九夜（ヤ）、九里（リ）

シはハンドブックにはないが、「四月」以外に「四季」が日常語にありそうだが、「二季」「三季」などとは普通言わず、助数詞の扱いは受けていないのだろう。上の②や③を見ると、シチやクの方は、まだ多く使われているように思えるが、しかし、多くはナナやキューと並んで使われているに過ぎず、ナナが使えずシチだけとされているものは「七月」「七時」「七時限」「七人」で、キューが使えずクのみのものが「九月」、「九時」、「九段（段位）」「九里（リ）」である。いずれもごく少数であり、この少数の例外にしても今日あらたに基準を作るとしたら、このままにはならないと思われる。「七人」は現在では「ナナニン」も広く使われているし、「九里」も今日なら「キューリ」と読まれる場合がかなりありそうである。ネット上で「胡瓜」と「九里」を掛詞にして、何か書いているひとが見つかることでもそれは分かる。

さて、ヨン・ナナ・キューが明治時代を通して標準的な数詞でなかったことは、日本語と外国語の二ヶ国語の辞書の記述や外国人の日本語の記述から分かる。たとえば、1879年（明治12年）に出版されたアーネスト・サトウと石橋政方の『英和俗語辞典』の第2版には日本語の助数詞の比較的詳しい表などが付録として掲載されているが、「1本」から「10本」をip pon, ni hon, sam bon, shi hon, go hon, rop pon, shichi hon, hachi hon, ku hon, jip ponと記録している[2]。つまり、明治期においては、シホン、シチホン、クホンと数えたのである。「匹」についても、shi hiki、shichi hiki、ku hikiである。また、four

や seven や nine の記載にシ・シチ・クは含まれているが、ヨン・ナナ・キューは出ていない。したがって、シ・シチ・クがヨン・ナナ・キューに変わる言語変化が日本語の近過去にあったことになるが、ヨン・ナナ・キューの一般の語彙への浸透については、稿をあらためて論じるが、本稿では、ヨン・ナナ・キューとシ・シチ・クの関係を固有名詞を通して考えてみたい。固有名詞は、地名にしても、姓にしても、発音資料は一般語彙以上に入手しがたいので、音変化や言語変化の正確な年代などをさぐることはできないが、変化の事実は示しうるし、固有名詞の種類によってヨン・ナナ・キューの使われ方には違いがあることも述べることができると思われる。

１．ヨン・ナナ・キューの浸透以前の地名

『江戸地名字集覧』という本があるが、明治９年に東京八丁堀で生まれた著者が集めた東京の通称名を集めたものである。「江戸」と銘打っているのは、江戸時代から続いているだろうということだろうか。通称名としての小地名のことを著者は「字（あざな）」と呼んでいる。「字であるから公に用ひられてゐる町名は省くことにしたが、假令ば、青山に六軒町だの三筋町だのといふのがあるが、大概の人は知るまいと思ふ」と述べていて、出版当時の昭和初年には忘れ去られていたであろう地名ということになる。公式に記録されていた地名でもなく、発音の確認が容易ではなく、著者自身、凡例で「私が此の書にふつたよみがなが誤りだらけであらうかと案じてゐます」とも書いている。四・七・九の読み方を知る上では個々の読みの正確さはそれほど重要ではなく、明治９年生まれの著者の読み方を知ることだけでも過去の四・七・九の発音の仕方が分かって、本稿の目的には十分であると言える。

さて、「四」の付く地名では、ヨンの発音は皆無で、基本はシであり、和数詞が期待されるところなどでヨ（ツ）が使われている。シと読む地名としては、「四方店（しほうだな）」（京橋銀座）、「四丁目谷（しちやうめだに）」（麹町元園町二丁目）、「四軒町（しけんちやう）」（神田美土代町四丁目）、「四軒寺（しけんでら）」（上野公園内）、「四軒寺町（しけんでらまち）」（本郷駒込蓬莱町）、「四軒屋敷（しけんやしき）」（神田千代田町）をあげている。和語数詞を使う地名が「四ツ目（よつめ）」（本所茅場町二丁目）、「四ツ辻（よつつじ）」（麻布飯倉二丁目）、「四ツ家町（よつやまち）」（高田千登世町）である。『江戸地名字集覧』のあげている「四」を使う地名で一例だけおもしろいのが、「四丁町（よちやうまち）」（牛込余丁町）である。今日では「四丁目」はかつてのシチョーメの読

みは全国的にヨンチョーメに変わったと考えられるが、「四丁」を「よちょう」と発音する地名も早くからあったことになるからである。もっとも、ヨチョーマチがあったところが牛込余丁町としているので、「四」は当て字で「余丁」の書き換えだったかもしれない。

「七」で始まる通称地名では「七曲」が3ケ所あって、くねくね曲がった道が続いていたところだろうか、すべてナナマガリであるが、他の地名でナナを使っているものはなく、すべてシチである。「七軒」が6ケ所あるがすべてシチケンである。「七軒町」も3ケ所シチケンチョー（「しちけんちやう」）である。他に「七騎町（シチキマチ）」（赤坂青山北町六丁目）、「七面阪（シチメンザカ）」（下谷谷中初音町三丁目）、「七軒屋敷（シチケンヤシキ）」（小石川茗荷谷町）、「七軒寺町（シチケンデラマチ）」（牛込辯天町）がある。

「きう」と旧仮名遣いで読みのついている「九」を含む通称名はなく、今日まで続いている「九段坂」はもとより、「九軒屋敷（本郷駒込東片町）」はクケンヤシキ、「九軒町代地（神田元柳原町）」の発音はクケンチョーダイチ（「くけんちやうだいち」）とされている。また、日本橋通二丁目西にあった「十九文横町」は「じふくもんよこちやう」である。

要するに、明治時代前半の東京の通称名称では、「九」ではキューがまったく使われず、クが使われ、「七」のナナは和語との組み合わせでしか使われず、「七」の基本の読みはシチであり、「四」については、ヨンは存在せず、基本数詞はシであり、和数詞はヨツであったということである。ただし、「四丁」をシチョーと読む場合と、ヨチョーと読む場合がすでにあったらしいことが推定できるのである。

明治時代の丁目地名の発音については資料を他に求めることができる。数詞の発音が現在と異なっていたことは「四丁目」や「四町目」については確かである。丁目は今日では1丁（町）という長さの単位の意味を失ったが、もとは60間で1丁という長さ（約109メートル）に基づく街路沿いの細長い区画を指す名称であった[3]。以前は、「丁目」だけでなく、「町目」の表記も広く使われ、明治14年の内務省地理局から出された『郡区町村一覧』の表記は、当時の東京府ではすべて「町目」を使い、京都府ではすべて「丁目」を使っている。『郡区町村一覧』を始め、当時の内務省関係の地名資料では、地名にはフリガナが付いている。これは地名にはフリガナを付けて提出するようにという依頼を各地に出したことによっているので、いちおう権威のある地名の読み方になっている。しかし、当時の人にとってどう読むのか当たり前であった「四丁目」や「四

町目」などには、フリガナは付いていない。『郡区町村一覧』によると明治 14 年の時点で東京府や京都府には「四町目」も「四丁目」も多数存在するが、当時の標準的な数詞であるシ・シチ・クを使っていたという証拠を見つけることはできない。幸い、明治 18 年に編纂された内務省地理局の『地名索引』では、丁目地名にフリガナが付いている場合が多少ある。これによると、やはり、ヨンやキューはなく、シやクである。「シチヤウメ」とルビがある地名に「土樋四丁目末無」（仙台）があり、「四」にだけ「シ」とルビのある地名に「千住四町目」（武蔵南足立北豊島ノ内七町）、「江戸澤町四町目」（佐渡島相川）、「江戸澤町四丁目濱町」（佐渡島相川）がある。また「北六番町九丁目末無」（仙台）は「クチヤウメ」とある。また、明治期の他の地名資料では、明治 7 年の『茨城県管下各区町村名簿』[4]に第一大区第四小区の町名として、「本四町目（ホンシチョウメ）」と「裏四町目（ウラシチョウメ）」があり、第一大区第五小区に「本七町目（ホンシチチョウメ）」と「裏七町目（ウラシチチョウメ）」と「九丁目（クチョウメ）」がある。したがって、シチョーメ、シチチョーメ、クチョーメと発音するのが、明治期の標準的な発音の仕方だったと思われる。大正時代にも日本の地名の読み方をしめす資料は、1923 年（大正 12 年）に出版された『市町村大字読方名彙』ぐらいしかないが、丁目地名は町名とは扱われず、静岡市の七間町（シチケンチョウ）なら、当時は一丁目から三丁目まであったが[5]、「七間町（一一三）」と書かれ、三丁目の発音などももちろん示されていない。したがって、四丁目、七丁目、九丁目の発音も『読方名彙』でもごく例外的な場合に「元四丁目（モトシチヤウメ）」（京都市上京区の町名）や四丁目以外存在しない「下魚棚四丁目（シモウヲノタナシチヤウメ）」（京都市下京区）や「四丁目尻（シチヤウメジリ）」（鳥取市）などの記載から推定できるだけである。見落としがあるかもしれないが、シチチョーメやクチョーメの例を見つけることはできなかった。しかし、四丁目、七丁目、九丁目をヨンやナナやキューと読む例もなく、正確な言語変化の年代は特定できないが、ヨン・ナナ・キューが使われるようになったのは大正時代末期から昭和時代にかけて起こった変化だと考えられそうである。

2．ヨン・ナナ・キューへの地名の変化

現代の丁目地名での四・七・九の発音はどうなっているだろうか。読みをのせることにしている地名辞典でも「四丁目」や「七丁目」などの丁目にフリガナを付けない傾向は現代でも変わっていない（『全国地名読みがな辞典』、清光

社、『日本分県地図地名総覧』、人文社）。まず、丁目地名にも発音が示されている点が特筆できる『新訂青森県地名辞典』（青森放送）を調査してみた。索引もあり、県内全域の小字名まで収録されている貴重な資料である。これによると、「四丁目」は例外なくヨンチョーメであることが分かった。青森県の「四丁目」の中から青森市のものだけ示すと、次の通りである。

① 青森市久須志四丁目（クスシヨンチョウメ）
② 青森市千刈四丁目（センガリヨンチョウメ）
③ 青森市本町四丁目（ホンチョウヨンチョウメ）

「七丁目」は、八戸市根城七丁目（ネジョウナナチョウメ）が唯一の例である。「九丁目」の例は青森県にはなかった。

『静岡市の町名、字名』（平成6年版）で調べてみると、この時点でのすべての四丁目（安西、大岩、上足洗、北安東、沓谷、国吉田、駒形通、新富町、瀬名中央、田町、千代田、東新田、登呂、中田、広野、本通、曲金、松富、丸子、みずほ、用宗、八幡、与一）はヨンチョーメと読ませており、すべての七丁目（田町、千代田、本通、曲金、丸子）はナナチョーメであり、九丁目が本通にひとつあるが、キューチョーメである。

わたし自身の内省からも丁目地名ではシ・シチ・クではなく、ヨン・ナナ・キューを使いそうであるが、おそらく、現代ではラジオ・テレビ放送などの影響もあり、丁目地名ではヨン・ナナ・キューに統一されてしまったのではないかと思われる。『新明解日本語アクセント辞典』（三省堂、2001）に「四丁目」「七丁目」「九丁目」は、ヨンチョーメ、ナナチョーメ、キューチョーメでしか見出し語になっておらず、シチョーメ、ヨチョーメ、シチチョーメ、クチョーメがないのはそういうことであろう。丁目地名の発音がヨン・ナナ・キューになってしまったことは、NHKの基準がすでにそのようになっていることとも無関係ではないだろう。『NHKことばのハンドブック』によると、放送用語としてヨンチョーメ、ナナチョーメ、キューチョーメを使うことになっている。

郵便番号簿の電子データがあるが、全国の読みの入った町域名以上の地名データが入手可能である。随時更新されており、ホームページからダウンロード可能である。本稿では、2007年11月のデータを使用した。本稿で郵便番号簿のデータと言えばこのことである。町域名というのは、市町村未満の大字相当の地名であるが、「～町一丁目」などは郵便番号では基本的に無視され、丁目部分をとった地名を郵便番号簿では町域名としている。さて、郵便番号簿のデータで現代の「四番町」や「四番丁」で、発音が明記されているものを取り出してみると

6ケ所ある。「四番町」に東京都千代田区、静岡県静岡市葵区、京都府京都市上京区、兵庫県神戸市長田区、岡山県笠岡市のものがあるがすべてヨンバンチョーである。また、和歌山県和歌山市に「四番丁」があるが、これもヨンバンチョーである。「ヨン」という数詞自体の成立が明治中期以降だと思われるし、明治時代には、「四番」は一般語としてもシバンではなくヨバンが使われていたし[6]、上で見たように大正期においてもヨバンが地名で使われていたので、これらの「ヨン」は新しく命名されたか、発音がヨからヨンに変わったものと考えられる。

神戸市長田区には一番町から七番町まであり、「四番町（ヨンバンチョウ）」と「七番町（ナナバンチョウ）」があるが、どちらも発音が変わったものである。1923年（大正12年）に編纂された『市町村大字読方名彙』には、ヨバン、シチバンと記載されている。同様に、和歌山市のヨンバンチョーとキューバンチョーは発音が変わったケースである。和歌山市には「一番丁」から「十三番丁」まであるが、現代の郵便番号簿の読みでは、「四番丁」「七番丁」「九番丁」の読み方はヨンバンチョー、シチバンチョー、キューバンチョーである。『市町村大字読方名彙』では「丁」ではなく「町」が使われ「四番町」のようになっているが、1880年（明治13）の『和歌山県郡区町村改正地名鑑』で既に「丁」の字が使われているので、表記については『読方名彙』の間違いであろう。「四番」「七番」「九番」の発音については、『読方名彙』も『地名鑑』もヨ・シチ・クになっており、明治前期から大正後期まではすくなくともヨバンチョー、シチバンチョー、クバンチョーだったものと思われる。それが、二十世紀のどこかで、ヨからヨン、クからキューへの変化を受けたことになる。『市町村大字読方名彙』では、「～丁目」とはことなり、「～番町」の場合は地名として扱われていて、たいていの場合は発音表記が添えられているので[7]、「市部町名」の番町（丁）地名から四番町（丁）、七番町（丁）、九番町（丁）の発音を調べてみた。対象は発音表記があるものに絞り、発音表記は『読方名彙』のとおりとした。なお、「町」をチョーと読む場合はフリガナが付けられていないようである。

① 東京市麹町区四番町……ヨバン
② 京都市上京区四番町、七番町……ヨバン、シチバン
③ 大阪市西区阿波座四番町……ヨバン
④ 横浜市九番町……クバン
⑤ 神戸市林田区四番町、七番町……ヨバン、シチバン
⑥ 仙台市連坊小路東七番丁、東九番丁…ヒガシシチバン、ヒガシクバン
⑦ 仙台市新傳馬町四番丁……ヨバン

⑧　仙台市勾當台通北四番丁、北七番丁…キタヨバン、キタシチバン
⑨　仙台市宮町北四番丁、北七番町……キタヨバン、キタシチバン
⑩　仙台市二日町北九番丁……キタクバン
⑪　静岡市四番町……ヨバン
⑫　新潟市横七番町通……ヨコシチバンチヤウドホリ
⑬　和歌山市四番丁、七番丁、九番丁……ヨバン、シチバン、クバン
⑭　岡山市四番町、七番町……ヨバン、シチバン
⑮　呉市四番町……ヨバン
⑯　高松市四番丁、七番丁、九番丁……ヨバン、シチバン、クバン
⑰　丸亀市四番丁、七番丁、九番丁……ヨバン、シチバン、クバン
⑱　若松市浜四番町（福岡県）……ハマヨバン

当時の番町地名では、ヨバン、シチバン、クバンには例外がなかったことを確認しておきたい。現代の郵便番号簿では「七番町」もしくは「七番丁」を含む町域名は全国に9ケ所あるが、そのうち7ケ所（福島県白河市七番町、新潟県新潟市中央区横七番町通、静岡県静岡市葵区七番町、愛知県名古屋市港区七番町、京都府京都市上京区七番町、和歌山県和歌山市七番丁、香川県丸亀市七番丁）はシチバンを使い、2ケ所がナナバンを使っている。ナナバンを使うのは、兵庫県神戸市長田区七番町と岡山県笠岡市七番町である。神戸市長田区のナナバンチョーはシチバンチョーだったものの発音が変わったものであるが、岡山県笠岡市の「四番町（ヨンバンチョウ）」、「七番町（ナナバンチョウ）」、「九番町（キュウバンチョウ）」は、区画整理後に昭和36年に成立したかなり新しい町名である。昭和中期にはヨン・ナナ・キューが一般化していたことを物語っていると言えよう。

3．新しく命名された地名の場合

新しい地名では、当初よりヨン・ナナ・キューで命名されている。昭和中期以降に命名された地名であれば、ヨン・ナナ・キューが使われている可能性が高そうである。浜松市浜北区四大地は「ヨンダイチ」と読むが、昭和33年に浜北町に作られた大字である。愛知県知多郡武豊町の「九号地（キュウゴウチ）」は港内にあり、武豊町ホームページで尋ねたところ、1976年（昭和51年）に「公有水面埋立として表示登記」された埋立地であった。なお、「当初より『キュウゴウチ』として発音されている」との回答だった。

北海道の開拓地名はもう少し古い地名であるが、それでも、日本語に基づい

て命名されたものは明治以降の命名であり、従来から特殊な点があることが鏡味（1985）によって指摘されていた。北海道では、「四条はほとんど訓読のヨ・ヨンになり、シジョウは例外的と言ってよい。とくにヨン化がはげしいが、それはきわめて最近で、年をさかのぼるほどヨジョウが多く、またヨジョウのよみ方は［…］計画都市（条町名のある）の少ない、早くひらけた道南を除いて、ほとんど全道的に行きわたっている。」(p.124) と鏡味 (1985) は述べているが、ヨン化の十分な証拠を出しているわけではない。地名の発音についての記録が少ないからだ。また、「ヨジョウ→ヨンジョウ（著名な地名はヨジョウ）、シジョウ→ヨンジョウの大勢にあるが、このような変化には当然ヨンチョウメ、ヨンバンチなどのヨンのよみ方への同化が原因として考えられる。」(p.126) と述べているが、ヨンチョーメにしても大正時代までは全国的にシチョーメだったと考えられるので、北海道のヨンジョーの使用をヨンチョーメなどの影響下で成立したと見るのは安易な考え方だと思われる。むしろ、北海道の開拓地名におけるヨン・ナナ・キューは、大きな日本語の変化の中で起きている現象であることを説明するべきだと思われるのである。ヨンジョーもヨンチョーメの発音などへの同化というよりは、基本数詞がすでにヨンに変わっており、その変化と捉えるべきであろう。「北海道以外ではシジョウは安定しており、ヒチジョウ、ナナジョウ等の呼称が口頭通称としては行われても、書きことばとしてはシ、シチの伝統的表記守られているのに対して、北海道ではかなり、伝統的なよみにこだわらずに新しくヨジョウ、ナナジョウの訓読が行われている。最近ではヨジョウのヨンジョウ化も顕著で、ごく一部伝統的によまれたシジョウをも訓読にかえつつある」(p.127)。ここではヨンやナナが地名で以前以上に使われるようになることを「訓読み化」ととらえているが、それは数詞全体の流れというよりは、ヨンやナナだけを考えたもので、しかも、この変化を訓読み化ととらえると、クからキューへの変化やヨからヨンへの変化、さらに言えば、ミからサンへの変化は説明できなくなる。「訓読み化」については８章で論じたい。

なお、地名ではないが、固有名詞の河川名の場合も北海道ではヨン・ナナ・キューが、現在、多く使われている。

【北海道の河川名】（『河川名よみかた辞典』より）

① 四の沢川（ヨンノサワガワ）……石狩水系一級河川
② 四十号の沢川（ヨンジュウゴウノサワガワ）…佐呂間別川水系２級河川
③ 四線川（ヨンセンガワ）……十勝川水系１級河川、
天塩川水系１級河川、

北見幌別川水系２級河川

④　七号川（ナナゴウガワ）……石狩川水系１級河川

⑤　七線川（ナナセンガワ）……十勝川水系１級河川、
増幌川水系２級河川、

⑥　七線沢川（ナナセンザワガワ）……天塩川水系１級河川

⑦　九号川（キュウゴウガワ）……十勝川水系１級河川

⑧　九線川（キュウセンガワ）……石狩川水系１級河川、
天塩川水系１級河川

北海道の河川名は明治期以降に付けられたものが多いからこのような河川名が目立つが、北海道でなくても新しく河川名が「四号川」などと付けられれば、当然、ヨンゴーと読まれるものと思われる。『舞阪の地名』(静岡県舞阪町、2005)によると、吹上地区の準用河川名には一号から五号まであって、「吹上四号川」の読みは「フキアゲヨンゴウガワ」である。準用河川に指定されたのは 1974 年だというから、命名されたのも新しい河川名である。

４．小字名の四・七・九

小字（こあざ）というのは、今日の都市部の町名がかつての江戸時代の村名に対応していることが多いが、村の内部にあった小さな地名に対応する小地名のことである。都市部では小字は廃止していない場合でも地形図にものらず、ほとんど意味を失っていて、住居表示が済めば、公称地名としては完全に廃止されたことになる。農村部では小字の一部は地形図にも出てくるし、実際に使われている可能性もある。さて、小字名の四・七・九を含む地名であるが、一般の地名以上にヨン・ナナ・キューが使われている。水田の大きさを表す「五反田」のような地名「[数詞] ＋反田」は小字のような小地名に多い名称である。大きな地名にまで昇格する地名は東京の「五反田」のように皆無ではないが、必ずしも多くない。郵便番号簿のデータで「四反田」、「七反田」、「九反田」を全国の町域名のデータから検索すると、次の７ケ所しかない。

①　宮城県　気仙沼市……四反田　シタンダ

②　宮城県　伊具郡丸森町……四反田　シタンダ

③　福島県　田村郡三春町……四反田　シタンダ

④　長野県　須坂市……九反田町　クタンダマチ

⑤　静岡県　沼津市……松下七反田　マツシタヒチタンダ

⑥　愛知県　名古屋市中川区……七反田町　ヒチタンダチョウ

⑦　高知県 高知市……九反田　クタンダ

シチのシ・ヒ交代形のヒチが見られるが、例外なく、シ・シチ・クと古くからの数詞が使われているのが特徴的である。ところが、小字名を調べると、町域名とはことなり、ヨン・ナナ・キューがある程度は使われている。『角川地名大辞典　静岡県』の付録の小字集[8]の中で読みがあるものから四・七・九を含む地名を取り出したものを付録に資料として付けるが、この中から「四反田」を取り出してみると、以下の通りだった。

①　四反田（ヨンタンダ）　　静岡市八幡、細江町広岡
②　四反田（ションタンダ[9]）　　静岡市見瀬
③　四反田（シタンダ）　　静岡市中田、静岡市高松、静岡市丸子、静岡市石田、浜松市村櫛、浜松市堀江、浜松市下、焼津市中里、細江町中川、小山町大胡田、南伊豆町市之瀬、南伊豆町一色

シタンダがもっとも多いが、ヨンタンダを使っている小字も２ケ所にあった。町域名の場合にはシタンダという読みしかないことを考えると、小字の方が町域名のような比較的大きな地名よりもヨンを受け入れていると思われる。

同様のことは、ナナついても言える。

①　七反田（坪）（ナナタンダ）　　静岡市大谷
②　七反田（シチダンタ）　　静岡市有東、静岡市八幡、磐田市玉越
③　七反田（ヒチタンダ）　　静岡市小黒、浜松市都盛、磐田市向笠竹之内、岡部町村良

「九反田」の例は見つからなかったが、「九反坪（キュータン）」は静岡市小鹿にあった。おそらく全体で「キュータンツボ」と発音するのだと思うが、坪にルビが付いていないので、確定することはできない。小字名でヨン・ナナ・キューが見つかりやすいというのは、静岡県だけの傾向でないことは、落合（1974）の尼崎の小字名でもヨン・ナナ・キューを確認することができる。「小字の読み方は、主として昭和三八年二月調『尼崎市町名大字小字名調書』によった」とある。旧園田村地区の小字名として「四ノ坪（よんのつぼ、富田、戸ノ内、中食満）」や「九ノ坪（きゅうのつぼ、田能）」をあげている。

他にも、シ（ヨ）・シチ・クではなくヨン・ナナ・キューが使われている小字名を静岡県の小字名から探すと、以下のものがあった。

①　四割田（ヨンワリダ）　　静岡市中原

② 四十石（ヨンジッコク）　静岡市南
③ 四通（ヨントオリ）　磐田市西貝塚
④ 七十割（ナナジュウワリ）　焼津市上小田
⑤ 七本松（ナナホンマツ）　焼津市治長請所
⑥ 九間割（キューケンワリ）　静岡市松富上組
⑦ 九斗地（キュウトジ）　焼津市岡当目

ナナホンマツと読む⑤に対して京都市上京区の「七本松通」はシチホンマツドオリであるし、②はヨンジッコクだが、福島県河沼郡会津坂下町にある「四十石」がシジュツコク[10]である。郵便番号簿に出ているような地名がシチやシを使っているのに、小字名では、ヨン・ナナ・キューを取り入れている場合がある点が予想外であった。小字の発音や地名の発音について扱った先行研究はないが、小字名の発音の方が変化しやすい傾向を示していると思われる。

もっとも、ヨン・ナナ・キューが小字にあらわれやすいといっても地域差もありそうだ。2008 年現在で小字名の集成だけでなく、発音も調べられ、索引まで作られているケースは全国でも少ないが、青森県は例外だ。『新訂青森県地名辞典』では、小字名であっても「四」で始まる地名でヨンを使う地名はなく[11]、同様に、「九」で始まる地名でキュウと読む地名もない。「七」で始まりナナと発音する地名にしても、「七平（ナナヒラ）」や「七曲（ナナマガリ）」など、古くからナナと使われた和語との組み合わせに限られるようだ。

５．姓の場合の四・七・九

日本では、姓のデータを国家が整理しているわけではなく、しかも、読みについては、姓の研究に頻繁に利用される電話帳データにもなく、日本人の姓の発音についての客観的な資料はほとんどない。『日本の苗字　表記編』は、詳細は明らかにされていないが、苗字研究家と生命保険会社（第百生命保険相互会社、東邦生命保険相互会社）の登録姓の資料に基づくとされている。姓の発音についての比較的規模の大きい資料としてはこれが唯一のものである。巻末に四・七・九ではじまる姓を『日本の苗字　表記編』から抜き出したリストを付けてあるので、参考にされたい。リストには、四で始まる姓のすべてがあるが、七と九については、とくに抽出基準を設けたわけではないが、一般的だと思われるもの、［数詞＋助数詞］としての理解が可能なものに限ってまとめてある。

『日本の苗字　表記編』に基づくと、「四」で始まる姓で確認したが、「四」をヨンと読む姓は存在しない。基本はシであり、「四個」はヨンコではなく、シ

コである。「四本松」もシホンマツである。平民苗字必称令が出され、最終的に日本人の姓が固定したと考えられる明治８年以降の明治前期にはまだヨンの発音が存在していなかったことを示していると考えられる。また、「四条」姓の読みに「シジョウ」と「ヨジョウ」があるので、ヨンジョーが生まれる前にヨジョーが使われていたことを示している。「四ケ所」や「七ケ所」という姓があるが、今日なら『NHK ことばのハンドブック』の記載どおり、「～ケ所」の際に使われるのはヨンやナナである。姓においては、ヨンもナナもなく、シカショ、シチカショとシやシチになっている。小字名のところでも詳しく見た「四反田」であるが、姓ではシの発音しか使われず、ヨンが使われていない点が小字名の発音とは異なっている。

シタンダ（姓）→シタンダ、ヨンタンダ、ションタンダ（静岡県の小字名）

したがって、小字名の発音が後に変化したものだと考えられるのである。「四百刈」という姓もシヒャクガリという読みしかなく、「四」をシと読んでいるが、郵便番号簿の町域名には「四百苅」（福島県喜多方市）があり、現在、ヨンヒャクガリと読んでいる。「刈」や「苅」は助数詞で、「刈り取った稲の束を数える単位から『耕作する田地』を呼ぶ広さの単位として使われる」（『地名用語語源辞典』）ものである。喜多方市の「四百苅」がかつてシヒャクと読んだかどうかは分からなかったが、「四百刈」や「四百苅」という古くからの地名があれば、おそらく、明治初年にはまだシヒャクと読んだと考えられるのである。姓における「九」の基本の読みもクである。「九反田」はクタンダであり、「九俵」はクヒョーだし、「九個」はクコであり、「九軒」はクケンか、クノキである。キューの読みを使う姓もないわけではなく、「九淵（きゅうえん）」「九霞（きゅうか）」「九鼎（きゅうてい）」「九峰（きゅうほう）」「九峯（きゅうほう）」「九豊（きゅうほう）」が見つかるが、各地にある地名をもとにしている姓ではないし、数詞＋名詞に戻すのもままならないような姓であり、音読みを利用してつくった姓で、口語で意味がとれそうなものはなく、本当に数量を問題にしている数詞なのかどうかも分からないような、語源不詳の姓である。シチとナナではシチが多くの姓に使われている点が目に付く、ナナが使えるところではたいていシチの発音もあることが多い。「七里（シチザト）」、「七山（シチヤマ）」、「七原（シチハラ）」、「七島（シチシマ）」、「七谷（シチシマ）」などであるが、和語とは和数字、漢語とは漢数字という原則に従えばシチは和語には出てこないはずであるが、これらの存在は、漢数字が和語とも使われるケースがかなりあったことを暗示

している。ナナとしか読まない姓は、「七村（ナナムラ）」ぐらいで少ないようである。明治３年に平民苗字許可令が出て、明治８年に平民苗字必称令が出ている。明治８年前後に日本人の姓の種類は固まり、発音も事実上固定化されたものと見られる。したがって、ヨン・ナナ・キューへの言語変化以前に姓は成立していて、読みも明治初年までには固定化したと考えられる。姓の場合は、他人から読み間違われても、姓の読み方を変えるという他者指向的な変化は起こりにくいのではないだろうか。地名の場合は、姓ほどには読みに対する保守性はなく、漢字の読み方をあとから変えたり、よそ者の読み方によって地名の読み方が変わったりするケースはかなり報告されている。

６．言語変化の諸傾向

ヨン・ナナ・キューへの変化は、固有名詞といってもその種類によって違いがあり、変化への傾向は、丁目地名　＞　小字地名　＞　通常地名　＞　姓のようになっていると思われる。地名の場合は、一般に、姓ほどには読みに対する保守性はなく、よそ者の読み方によって地名の読み方が変わったというケースが富山県の「立山（タチヤマ→タテヤマ）」などかなり報告されている[12]。また、よそ者とは無関係に訓読みが音読みに変えられたりして、二荒山（フタラサン）→二荒（ニコウ）→日光→ニッコウが出来ているとも説明されているし[13]、「小豆島（ショウドシマ）」から「小豆郡（ショウズグン）」が作られたり、登米町（トヨママチ）から登米郡（トメグン）が作られたり、読みを変えて郡名が作られるケースもあるようだ。現在は、この登米郡は登米市になり登米町は登米市の町名の一部として使われているようだが、トメシ・トヨママチヒネウシ（宮城県登米市登米町日根牛）のようになっていて、非常に分かりにくい読み方になっている[14]。

固有名詞の種類による違い以外にもシ・シチ・クからヨン・ナナ・キューへの変化に関して、容易に変化する対象や、受け入れにくい対象など、違いがみられるので、ここではまとめて考察しておきたい。

①　丁目地名　＞　番町地名

②　その土地に多くある地名　＞　珍しい地名

③　ヨン　＞　ナナ、キュー

各地にある丁目地名のような地名でシチョーメとヨンチョーメというふうに読みが異なっていると、読み間違えられることも多くなり、言語変化への圧力が高まることが考えられる。各地にある地名ということで丁目地名は普通名詞に

近い性質を帯びているという説明もできる。丁目地名は都市域を中心に現在どこにでもあり、一種の住所用語として一般の語彙としても普及していると言える。実際、『明鏡国語辞典』（大修館、2002）では「丁目」は見出し語として採用されている。青森県の通常の地名では「四」をヨンと読む地名は黒石市上十川の小字に「大野四番」などがあるが、他にはない。しかし、「四丁目」だけはすべてヨンチョーメと発音しているのは、丁目地名が固有名詞の枠からはみ出していると見ることで説明できる。また、丁目地名で、ヨンチョーメ・ナナチョーメ・キューチョーメに統一されてしまったのは、NHK の放送基準もそうなっており、ラジオ・テレビの影響も大きかったのではないか。

一方、数詞の連続使用という点では丁目地名と共通している番町地名の場合を考えると、一般の語彙として「四番」、「七番」、「九番」を使う場合には、ヨン・ナナ・キューが標準的な発音になったと言えるが、番町地名の場合は、ヨバンチョーからヨンバンチョーになったものがあるが、シチバン、クバンは今でもかなり使われている。したがって、丁目地名ほど番町地名はヨン・ナナ・キューへの変化を受けていないと言えるだろうし、番町地名の傾向から、ヨンへの変化はナナ・キューへの変化よりも強いのではないかと考えられる。丁目地名と番町地名で傾向が異なるのは、一般の番町地名が住所用語と言えるほど普及しておらず、全国どこにでもある地名ではないし、その土地に多くある地名ではないということだと思われる。実は、地域によっては以前から番町地名を丁目地名のように町名の下位分類のような使い方をしている。「～町～番町」のような使い方である。郵便番号簿のデータではこの種の番町地名は数詞の読みがなく、「4 バンチョウ」のように記載されている。この種の四番町（丁）、七番町（丁）、九番町（丁）の読みは、『新版日本分県地図地名総覧』（2006 年版、人文社）や『全国地名読みがな辞典』（第六版。清光社）で確認できるものもある。三重県名張市にはアラビア数字を使った「桔梗が丘 4 番町」、「春日丘 4 番町」などの地名がかなりあるが、読みは「百合が丘東 9 番町」がキューバンチョーだということ以外は確認できなかった。確認できたもののなかでは、ヨン・ナナ・キューを使うものが多いことは言える。以下がそうである。

① 青森県十和田市　西四番町、西十四番町、東四番町、東十四番町、東二十四番町
② 山形県山形市　南四番町
③ 長野県塩尻市　大門四番町、大門七番町
④ 兵庫県西宮市　上ケ原四番町、上ケ原七番町、上ケ原九番町

⑤　兵庫県西宮市　苦楽園四番町
⑥　兵庫県西宮市　甲子園四番町、甲子園七番町、甲子園九番町
⑦　徳島県徳島市　佐古四番町、佐古七番町、南佐古四番町、南佐古七番町
⑧　香川県綾歌郡宇多津町　浜四番丁、浜七番丁、浜九番丁

しかし、一部もしくは全部が異なるものもかなりある。

①　愛知県豊橋市　柱四番町、柱七番町、柱九番町　ヨン、ナナ、ク
②　宮城県仙台市宮城野区　東七番丁、東九番丁　シチ、ク
③　宮城県仙台市若林区　東七番丁、東九番丁　シチ、ク
④　石川県金沢市　西町四番丁　ヨ
⑤　熊本県八代市　郡築四番町、郡築七番町、郡築九番町　ヨ、シチ、ク

結局、番町地名の場合は、丁目地名とおなじような使い方をされる場合でも丁目地名ほどにはヨン・ナナ・キューが浸透していないことは確かである。

番町地名よりももっと珍しい地名を考えてみると、やはり、ヨン・ナナ・キューへの変化は受けにくいと思われる。たとえば「四本」を使った地名は、郵便番号簿には全国３ケ所の町域名があるが、3ケ所ともシホンのまま変化をしていない。

①　四本松町（浜松市南区）……シホンマツチョウ
②　四本松町（京都市下京区）…シホンマツチョウ
③　四本木（名古屋市緑区）……シホンギ

ある土地にそのタイプの地名が多くあることがヨン・ナナ・キューへの変化を促すことになるように思われるが、京都市の「九軒」地名の場合がまさにそうである。京都市では「九軒」地名はすべてキューを使っているのが特異であるが、京都市にはこの種の「～軒」地名のパターンの地名が非常に多いのである。以下は郵便番号簿の町域名からだ。

①　京都市上京区九軒町　キュウケンチョウ
②　京都市上京区御三軒町　ゴサンゲンチョウ
③　京都市上京区三軒町　サンケンチョウ
④　京都市上京区十四軒町　ジュウヨンケンチョウ
⑤　京都市中京区七軒町　シチケンチョウ
⑥　京都市中京区西九軒町　ニシキュウケンチョウ
⑦　京都市中京区東九軒町　ヒガシキュウケンチョウ
⑧　京都市東山区五軒町（2ケ所）ゴケンチョウ
⑨　京都市東山区七軒町（2ケ所）シチケンチョウ

⑩　京都市東山区新五軒町　シンゴケンチョウ
⑪　京都市東山区廿一軒町　ニジュウイッケンチョウ
⑫　京都市東山区八軒町　ハチケンチョウ
⑬　京都市東山区六軒町　ロッケンチョウ
⑭　京都市下京区五軒町　ゴケンチョウ
⑮　京都市下京区三軒替地町　サンゲンガエチチョウ
⑯　京都市下京区三軒町　サンゲンチョウ
⑰　京都市下京区八軒町　ハチケンチョウ
⑱　京都市右京区嵯峨大覚寺門前八軒町　サガダイカクジモンゼンハッケンチョウ
⑲　京都市伏見区深草十九軒町　フカクサジュウキュウケンチョウ
⑳　京都市山科区八軒屋敷町　ハチケンヤシキチョウ

⑥、⑦、⑲で、キューが使われている。④でジュウヨンケンチョーでヨンも使われているが、⑤、⑨の「七軒町」は合計３ケ所すべてシチケンチョーである。この場合、ナナケンチョーにならないのは、郵便番号簿の町域名では全国すべての「七軒」地名がシチケンないしヒチケンになっていて、ナナケンではないことと関係しているかもしれないが、なぜ全国の「七軒」地名がナナケンにならないのか詳細は不明である。

７．明治 22 年の合併地名からシチとナナの関係

「七郷」という地名は合併地名[15]のようで、『消えた市町村名辞典』の例では、7 村ないしそれに近い数の村の合併などで誕生しているようだ。やや安易な命名の仕方で、次の合併には、数詞の意味がかえって邪魔になり、とても長年月に耐えられるような名称ではないと言える。だからこそ、消失地名にこの種の地名が多いのだろう。明治 22 年に全国的な市町村合併があったが、そのときに誕生した合併地名として、福島県田村郡、茨城県猿島郡にあった「七郷（ななごう）」があるし、埼玉県比企郡や岐阜県方県郡、滋賀県伊香郡にあった「七郷（ななさと）」も明治 22 年に 7 村合併している。高知県幡多郡の「七郷（ななさと）」の場合は、明治 22 年に 6 村合併しているので、さばを読んで「七郷」としたものらしい。ナナの使用は明治以前でも和数詞の期待される場所では使われていたが、主に漢語との組み合わせでは漢数詞のシチが使われるのが基本である。「郷」をゴーと読めば、音読みであり、漢数詞のシチが期待されそうだが、七郷（シチゴウ）が１ケ所、七郷（ナナゴウ）が２ケ所だった。さらに、七郷（ナナサ

ト）が 4 ケ所である。シチサトと読む消失地名はなく、和語のサトに対しては、漢数詞のシチはふさわしくなかったものと思われる。姓の読み方と比較してみると、「七郷」姓にはシチゴーとヒチカワしかない。ナナゴーもナナサトもない。ということは、姓の「七郷」は明治 22 年ではなく、姓が義務化された明治 8 年以前に合併している「七郷」であるはずで、その発音はシチゴーだったと考えられるのである。また、明治 22 年の頃にはナナがシチの領域まで浸透していたことも示していると思われる。

【七郷】		
姓の読み	⇨	明治 22 年の合併地名の読み
シチゴー		シチゴー（1）、ナナゴー（2）、ナナサト（4）

合併地名「四郷」の場合は 5 ケ村がシゴーで、2 ケ村がヨゴーであり、すべて明治 22 年に成立している。岐阜県安八郡の「四郷（よごう）」だけは明治 22 年に単独村制になっており、なぜ「四」という数詞が使われているのか不明だ。シゴー村がヨゴー村より数が多いことは、当時シの方がまだ一般的な発音だったことを示している。また、明治 22 年当時ヨンがまだ標準的な「四」の発音としては成立していなかったことを意味している。『日本の苗字　表記編』には「四郷」はないので、姓の読みと比較はできないので、明治 8 年前後にヨゴーが一般的だったかどうか推定することはできない。

8．シからヨンへの変化やシチからナナへの変化は訓読み化か？

アストン（1869）では、日本語には和数詞は 10 までしかないが、和数詞と和語、漢数詞と漢語を組み合わせるという日本語の数詞の組み合わせに関する原則が述べられている。おそらく、当時であったも、詳細に観察すれば、5 章の姓のところで述べたように、漢数詞が和語とともに用いられた例もあっただろうし、和数詞と漢語が用いられた例もあっただろう。漢語には漢数詞、和語には和数詞という組み合わせの規則には一部の例外があることにランゲ（1890）は気づき、和数詞と結びつく語の多くは和語であるが、漢語起源のものもあると述べている。和数詞が使われるのは和語や特定の漢語と述べている。たとえば、「晩」は漢語であるが、ヒトバン、フタバンと数え（この変則的な読み方は「一番」や「二番」との同音衝突が理由だったかもしれない）、和数詞とともに使われるからだ。それでも、和語・漢語と数詞の組み合わせの原則はかなりの程度

当てはまったのではないかと思われる。漢数詞、和数詞ということで問題になるのが、ヨンとナナの扱いである。これを和数詞と分類するなら、シからヨンへの変化、シチからナナへの変化は漢数詞から和数詞への変化ということになる。しかし、そうしてしまうと、ヨからヨンへの変化（四番のヨバンからヨンバンの変化など）は和数詞から和数詞への変化となり、なぜそのような変化が起こるのか説明できないし、一方では次第に使用範囲を狭めつつある和数詞一般の傾向と正反対の言語変化ということになってしまう。わたしは、ヨンとナナを和製漢数詞と捉えることが可能であると考えている。

ヨンは和数詞のヨツ（ヨ）と語形が似ていて、本来の漢数詞ではない。漢和辞典では訓読みと分類されている。しかし、漢字に詳しいひとでなければヨンが訓読みだということは思いもよらないことではないだろうか。実際、地名の研究者で数詞地名をあつかっているひとが和語系統の数量地名と漢語系統の数量地名を区別して、ダイヨンイワヤンというヨンを使う徳島県の海岸部の地名を漢語系統の数量地名としてあげている例がある（上野:2004)。おそらく、ヨンと訓読みのヨとの類似や漢和辞典の記載にとらわれずに、無意識的に漢語系統だと判断しているのだろう。ヨンを和数詞と見なすならば、本来の和数詞の用法でも使えないといけないが、今日、三以上の和数詞はほとんど使われなくなっており、和語であっても漢数詞とともに使われるようになっている。かりに、サン、ヨンが使えず、ミ、ヨンが使えるような語を多数指摘することができれば、ヨンはミと同じように和数詞の仲間であると言うことができると思われる。しかし、そのような組み合わせは『NHK ことばのハンドブック』の用例集では、ミキレ（三切れ)、ヨンキレ（四切れ）ぐらいしかない。ハンドブックの解釈では、「三切れ」ではミキレしか認めないが、「四切れ」ではヨンキレを標準とするが、ヨキレも容認するということになっている。しかし、この珍しい例が過去の実態を反映していたとしても、もはや過去の使い方で、静岡大学のあるクラスで 2008 年にアンケート調査をしたところ、ミキレを使い、ヨンキレを使うとした学生は学生 38 人のうち 1 人しかいかなった。ミキレとヨキレを使うとした古風な学生も 1 人だったが、多いのは、やはり、サンキレとヨンキレだけをもっぱら使うというパターンで 28 人だった。「三切れ」の読みとしてハンドブックが唯一の正しい読みとしているミキレを使うという学生は 2 人しかおらず、ミからサンへの言語変化は急激におこり、ほぼ完了していると思われる。また、ハンドブックはヨンキレとヨキレの場合にヨキレを容認可能としているが、ヨンキレとヨキレの両方を使うという学生も含めてヨキレを使う学

生は3人しかおらず、ヨキレからヨンキレへの変化もほぼ完了していると見てよいだろう。「三棟」については、さらに、漢数詞の勢力が現代では強くなっている。『日本の苗字　表記編』によると、「三棟」という姓の読みは「ミムネ」だけであり、おそらく、「ミムネ」か「ミツムネ」がかつての日本語の読みだったと思われる。郵便番号簿の町域名では、奈良市に「三棟町（ミツムネチョウ）」がある。今日ではNHKの台風情報などの放送で「住宅サンムネ」などを使い、『NHKことばのハンドブック』でも「サンムネ」「ヨンムネ」を標準とし、「ミムネ」や「ヨムネ」と発音してもよいという記述の仕方をしているが、「ミムネ」や「ヨムネ」の言い方はいずれ消えていくものと思われる。実際、「三棟」と「四棟」についても上記の学生38人に確認したところ、ミムネやヨムネも使うとした者はひとりしかおらず、残りの37人はもっぱらサンムネ、ヨンムネだった。要するに、現代ではサンとヨンが同じように使われる傾向が強く、三以上では和数詞が一般的に使われなくなっているのである。サンとヨンの語形の類似も考え合わせれば、ヨンは和製漢数詞で漢数詞のサンと同等と見なすのが妥当だと考えられる。そう考えると、ヨバンからヨンバンへの言語変化は、和数詞と漢数詞の組み合わせのルールだった可能性が有力であろう。ヨバンでは漢数詞を使うべきところに例外的に和数詞を使っていることになるが、和製漢数詞と捉えられるヨンを使うことでこの不整合性を解消したと考えられるからである。ナナがシチに対して勢力を増したことについては、和数詞があらたに漢数詞の機能も獲得したものと説明できる。そう考えれば、現代において三以上の和数詞がほとんど使われなくなっているにもかかわらずナナがシチに対して優勢になったことが説明可能だと思われる。

9．固有名詞とヨン・ナナ・キュー（要約）

本稿では固有名詞へのヨン・ナナ・キューの浸透について述べてきたが、主要な内容を箇条書きでまとめておこう。

① 丁目地名では現在ヨン・ナナ・キューが使われているが、複数の不完全な歴史的資料から推定して、大正時代までの丁目地名はシ・シチ・クだったと考えられる。

② 小字名ではヨン・ナナ・キューが使われる場合があることが静岡県の小字名などの調査から分かった。

③ 日本語で命名した北海道の地名は、比較的新しく、現在、ヨン・ナナ・キューが使われていることが多いことが知られているが、昭和中期以降

に新しく作られた地名なら、他の地域でもヨン・ナナ・キューが使われる場合があることがいくつかの例から分かった。

④ 番町地名における傾向や京都市の「～軒」地名の傾向から、めずらしい地名よりもその土地に多数あるような地名の方がヨン・ナナ・キューに変化しやすいことが分かった。

⑤ 姓では、基本的にはシ・シチ・クが使われている。日本人の姓の読み方が固定したのは地名よりも古いようで、ヨンの発音は使われておらず、ヨンは誕生していないことが分かる。ナナやキューが勢力を拡大する前であることも「七」や「九」を含む姓の複数の読みの可能性から明らかである。また、明治 22 年の合併地名との比較では、姓ではシチがナナに対してかなり優勢で、和語とシチの組み合わせもかなり使われていることが確認できる。シチとナナでは、合併地名ではナナが漢語とも使われ始めていて、ナナが明治 22 年当時勢力を拡大しつつあることが確認できる。

最後に、固有名詞の各種資料からは判断できなかったことを補足しておく。ヨン・ナナ・キューへの変化には、やはり、変化の理由になるものがあるはずだ。従来指摘されている中では、シ・シチ・クの聴覚上のあいまいさが要因として有力であるだろう。聴覚上のあいまいさは、聞き取りやすさ、言いやすさ、覚えやすさなども関連しているだろう。一般にはっきり聞き取るためには、ヨン・ナナの方がシ・シチよりも有効と感じられているようである。明治時代に日本語の教科書を書いたマコーレイ（1896）は、死人との連想で「四人」をシニンと読まないという通説とともに、「ヨ」「ナナ」「キウ」がシ・シチ・クにかえて使われることについて音のある種のあいまいさを避けるためという説明をしている（p.181）。

> Frequently one hears よ yo as a substitute for し shi; なゝ nana instead of しち shichi; and きう kyu instead of く ku; spoken for the numbers “four,” “seven” and “nine.” This usage avoids certain abmibiguities of sound, and an unpleasant association of the numeral phrase しにん shi nin “four persons,” with the word しにん shinin “dead person.”

『NHK ことばのハンドブック』では、ニュースなどで正確な情報伝達を目的とした番組では、「原則として聞きとりやすい発音を使う」として、「ジューヨン」と「ナナオク」を例にあげている。どうやらヨンやナナをシやシチより聞き取

りやすい発音と見なしているらしい。『幼児の数の指導』にもシチとシについて、「読みが類似しているために間違いやすい」としている。また、知能検査で「4－7－3－1」を復唱する際にも「シーシチーサンーイチ」とやるよりも「ヨンーナナーサンーイチ」の方が好成績になると指摘している（p.72）。

ヨン・ナナ・キューが地名に浸透していく過程は今のところ詳細は不明である。新しい地名がその時代の標準的な数詞で命名されるのは当然の話であるが、以前に命名された地名でも、言い間違いや聞き間違いや伝達上の明瞭性などを媒介に発音を変えてきたということなのかもしれない。

【参考文献】

青森放送編（1979）、『新訂青森県地名辞典』、青森放送。

秋永一枝編（2001）、『新明解日本語アクセント辞典』、三省堂。

今尾恵介（2004）、『住所と地名の大研究』、新潮社。

上野智子（2004）、「数量と地名」、『地名語彙の開く世界』、和泉書院、27-38。

NHK 放送文化研究所編（1992）、「数字の発音」、『NHK ことばのハンドブック』、日本放送出版協会、293-327。

小川琢治（1923）、『市町村大字読方名彙』、成象堂。

落合重信（1974）、「尼崎の小字名」、『尼崎市史』、第 10 巻、463-489。

鏡味明克（1985）、『地名が語る日本語』、南雲堂。

鏡味完二／鏡味明克（1977）、『地名の語源』、角川書店。

秋永一枝（2001）、『新明解日本語アクセント辞典』、三省堂、2001。

楠原佑介・溝手理太郎（1981）、『地名用語語源辞典』、東京堂。

静岡市役所市街地整備課（1994）、『静岡市の町名、字名』（平成 6 年版）、非売品。

人文社編（2005）、『新版日本分県地図地名総覧』、2006 年版、人文社。

駿河古文書会編（1977）、『静岡市の大字・小字名集成』、非売品。

清光社編（1998）、『全国地名読みがな辞典』、第六版。清光社。

竹内理三他編（1982）、『角川日本地名大辞典　静岡県』、角川書店。

地名情報資料室編（2000）、『消えた市町村名辞典』、東京堂。

内務省地理局編（1881）、『郡区町村一覧』、国立国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されている。

内務省地理局編（1885）、『地名索引』、復刻版（1973、名著刊行会）。

内務省地理局編纂物刊行会編（1986）、「関東・中部」、『明治前期全国村名小字調査書』、第 2 巻、ゆまに書房。

中村庄三郎編（1880）、『和歌山県郡区町村改正地名鑑』、国立国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されている。
日外アソシエーツ編（1991）、『河川名よみかた辞典』、日外アソシエーツ。
日本地名学研究所編（1972）、『愛知県地名集覧索引』、日本地名学研究所。
日本ユニバック編（1978）、『日本の苗字　表記編』、日本経済新聞社。
舞阪町（2005）、『舞阪の地名』、舞阪町。
松永美吉（1994a）、『民族地名語彙事典（上）』、日本民族文化資料集成 13、三一書房。
松永美吉（1994b）、『民族地名語彙事典（下）』、日本民族文化資料集成 14、三一書房。
松原達哉（1969）、『幼児の数の指導』、日本文化科学社。
三村清三郎（1929）、『江戸地名字集覧』、復刻版（1964、名著刊行会）。

［欧文］

Aston, William George (1869). A Short Grammar of the Japanese Spoken Language. Nagasaki.
Lange, Rudolf (1890). Japanisches Lehrbuch der japanischen Umgangssprache. Stuttgart & Berlin.
MacCauley, Clay (1896). An Introductory Course In Japanese. Kelly and Walsh. Kessinger Publishing から復刻版が出ている。
Satow, Ernest Mason / Ishibashi Masakata (1879). An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language. 2nd Edition, London, Yokohama, Kobe, Nagasaki, Shanghai. 復刻版（『英和俗語辞典』、1970、勉誠社）。
Satow, Ernest Mason/Ishibashi Masakata (1904). An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language. 3rd Edition, London, Yokohama, Kobe, Nagasaki, Shanghai. 復刻版（『英和口語辞典（第 3 版）』、1985、名著普及会）。

【資料１】「静岡県の四・七・九を含む小字名で読みが判明しているもの」[16]

加七東	カヒチヒガシ	引佐町狩宿
勘七川	カンヒチカワ	引佐町狩宿
金七	キンヒチ	引佐町四方浄
九ノ坪	クノツボ	細江町三和
九間割	キューケンワリ	静岡市松富上組
九間	クケン	浜松市末島
九左衛門元屋敷	クザヘモンモトヤシキ	引佐町東黒田
九左衛門西	クザエモンニシ	金谷町番生寺
九左衛門裏	クザエモンウラ	金谷町番生寺
九助窪	キウスケクボ	引佐町東黒田
九十沢	クジュウザワ	富士宮市麓
九十歩	クジュウブ	浅羽町大野
九頭申	クトウサル	引佐町渋川
九日神田	クカシンデン	引佐町田沢
九日田	クニチデン	浅羽町長溝
九日田	ココノカダ	富士宮市大宮、富士宮市西町
九斗地	キュウトジ	焼津市岡当目
九反坪	キュータン	静岡市小鹿
九反坪	クタンツボ	岡部町内谷
九反田坪	クタンダ	静岡市柚木、静岡市古庄
九反田	クタンダ	浜松市金折、磐田市上岡田、磐田市玉越
九反分	クタンブ	福田町豊浜
九平ノボツ	クヘイノボツ	引佐町渋川
九郎田	クロウデン	浅羽町湊
源七下	ゲンヒチシモ	引佐町狩宿
五十四分	ゴジュウシボ	浅羽町富里
七ケ町	シチガマチ	浅羽町富里
七ケ坪	ヒチガツボ	細江町三和、細江町中川
七ツ尾	ナナツオ	小山町須走
七ノ坪	ナナノツボ	磐田市笠梅
七回り	ナナマワリ	由比町今宿

七右エ門崩	シチエモンクズ	静岡市横山
七曲リ下	ナナマガリシタ	雄踏町山崎
七曲リ	ナナマガリ	雄踏町山崎、細江町中川
七曲	ナナマガリ	静岡市有東木、静岡市石部、小山町菅沼、金谷町横岡
七久保	ナナクボ	中川根町水川
七軒町	ヒチケンチョウ	浜松市成子町
七三谷沢	ナナミヤサー	静岡市下
七十割	ナナジュウワリ	焼津市上小田
七石新田境	ヒチコクシンデン	安西
七人作	シチニンヅクリ	静岡市梅ケ島
七人当	ヒチニンアタリ	浜松市鶴見
七通リ	ナナドーリ	静岡市南安東
七通	ナナトウリ	浜松市貴平、浜松市都盛
七谷	ナナタニ	焼津市策牛
七谷	ヒチダニ	焼津市関方
七反割	ナナタンワリ	静岡市中原
七反田(坪)	ナナタンダ	静岡市大谷
七反田	シチダンタ	静岡市有東、静岡市八幡、磐田市玉越
七反田	ヒチタンダ	静岡市小黒、浜松市都盛、磐田市向笠竹之内、岡部町村良
七反	ヒチタン	浜松市宮竹
七番出下	シチバンデシタ	静岡市南安東
七尾原	ナナオハラ	熱海市伊豆山
七尾	ナナオ	熱海市伊豆山
七平屋敷	ヒチベイヤシキ	引佐町田沢
七歩割	シチブワリ	浜松市新貝
七満賀里	ナナマガリ	南伊豆町青市
七面山	ヒチメンザン	天城湯ヶ島町雲金
七面前下坪	ヒチメンサンシタ	静岡市沓谷
七本松	ナナホンマツ	焼津市治長請所
七夕	タナバラ	南伊豆町青市
七郎新田	シチロウシンデン	修善寺町修善寺

七郎兵衛元屋敷	ヒチロウベイモトヤシキ	引佐町渋川
七郎平屋	ヒチロベイヤ	引佐町東黒田
四〆地	シカンジ	浜松市貴平
四の沢	シノサワ	松崎町小杉原
四ケ間	ヨカマチ	浜松市長名
四ケ町	ヨカマチ	浜松市大見、磐田市大原
四スマ畑ケ	ヨスマバタケ	静岡市黒俣
四ツ溝	ヨツミゾ	修善寺町牧之郷
四ト一	シブイチ	金谷町大代
四ト六	シトロク	浜松市白洲
四ノ坪	ヨンノツボ	磐田市笠梅
四ノ坪	シノツボ	磐田市玉越、細江町三和、福田町豊浜
四割田	ヨンワリダ	静岡市中原
四貫野	シカンノ	福田町大原
四間割	シケンワリ	静岡市与一右衛門新田、静岡市門屋
四近	シキン	河津町笠原
四軒村	シケムラ	静岡市下川原
四五ノ宮	シゴノミヤ	岡部町新舟
四条	シジョー	静岡市北安東
四十一	ヒジューチ	静岡市坂ノ上
四十九膳	シジュウクゼン	磐田市向笠西
四十石	ヨンジッコク	静岡市南
四十分割	シジウブワリ	浜松市国吉
四十歩	シジュウブ	浜松市向宿町
四瀬目	ヨセメ	天城湯ヶ島町
四切	ヨキレ	大久保
四丁島	ヨンチョウジマ	焼津市大覚寺上、焼津市大覚寺下
四通田	ヨトーリダ	静岡市青木、静岡市中田）
四通田	ヨトオリダ	焼津市塩津、焼津市方ノ上
四通田	シトオリダ	焼津市岡当目
四通	ヨントオリ	磐田市西貝塚
四通	シドウリ	浜松市下

四反谷	シタンヤ	浜松市西鴨江
四反島	シタンジマ	金谷町竹下、細江町中川
四反田坪	ヨンタンダ	静岡市小鹿
四反田坪	シタンダノ	静岡市国吉田
四反田坪	シタンダ	静岡市柚木
四反田	ヨンタンダ	静岡市八幡、細江町広岡
四反田	ションタンダ	静岡市見瀬
四反田	シタンダ	静岡市中田、静岡市高松、静岡市丸子、静岡市石田、浜松市村櫛、浜松市堀江、浜松市下、焼津市中里、細江町中川、小山町大胡田、南伊豆町市之瀬、南伊豆町一色
四反堀	シタンダ	細江町中川
四之沢	シノサワ	中伊豆町筏場
四分一	シブイチ	金谷町大代
四文尻	シモンジリ	中伊豆町下白岩
四方浄	シホウジョウ	引佐町の大字
四百枚	ヨンヒャクマイ	天城湯ヶ島町
四万道	シマンドウ	引佐町伊平
四門土堆	シモンドテ	富士宮市安居山
四本松後	シホンマツウラ	浜松市都盛
四本木	シホンギ	大仁町神島
四郎兵衛	シロベイ	引佐町狩宿
庄九郎谷	ショウクロウダニ	南伊豆町一条
上九尺	カミクシャク	静岡市牛妻
甚七屋舗	ジンヒチヤシキ	引佐町西黒田
孫七西	マゴシチニシ	金谷町番生寺
孫七前	マゴシチマエ	金谷町番生寺
孫七裏	マゴシチウラ	金谷町番生寺
孫七	マゴヒチ	引佐町四方浄
惣七洞	ソウシチボラ	修善寺町牧之郷
弥九郎界戸	ヤクロウガイト	引佐町渋川

【資料２】『日本の苗字　表記編』から四・七・九で始まる姓（七と九は抜粋）

四ケ所	シカショ、シカショウ、シガショ
四ケ田	シカダ
四ケ野	シガノ
四ツ井	ヨツイ
四ツ倉	ヨツクラ
四ツ塚	ヨツズカ
四ツ家	ヨツヤ
四ツ屋	ヨツヤ
四ツ島	ヨツシマ、ヨツジマ
四ツ木	ヨツギ
四ツ本	ヨツモト
四ツ柳	ヨツヤナギ
四ツ橋	ヨツハシ、ヨツバシ
四ツ永	ヨツナガ
四ツ田	ヨツダ
四ツ目	ヨツメ
四ツ碇	ヨツイカリ
四ツ谷	ヨツタニ、ヨツヤ
四ツ辻	ヨツツジ
四ツ釜	ヨツガマ
四ツ門	ヨツカド
四ノ原	シノハラ
四ノ宮	シノミヤ
四こぶ	シコブ
四丁目	シトカ
四七	シナ
四万	シマ
四下	ヨツモト
四中	シナカ
四主	シジュ、ヨヌシ
四之宮	シ
四九	シク
四五百森	ヨイオノモリ
四井	シイ、ヨツイ
四位田	ヨツイダ
四位	シイ、ヨツイ
四位例	シイレ
四保	シホ
四俣	ヨツマタ
四俵	シタワラ
四倉	シクラ、ヨクラ、ヨツクラ
四個	シコ
四元	シゲン、シモト、ヨツモト、ヨモト
四六	シロク
四分一	シブイチ
四分田	シブタ
四十	アイ、シジュウ、ヨソ、ヨト
四十万	アイマン、シシマ、シシヤ、シジイマ、シジマ、シジュウマン、シズマ、ヨスマ、ヨソミヤ
四十万谷	シシマヤ、シジマヤ
四十九	ヨソク、ヨトク
四十九員	シズル、ツルシ
四十九院	シジフクイン、ツクシイン、ツルシ、ツルシイン、ツルス
四十九顆	ヨイナラ
四十九願	ヨイナラ
四十住	アイスミ、シウチ、シジフミ、ヨスミ、ヨズミ、ヨソズミ
四十八	ヨソヤ
四十八朝	ヨイナラ、ヨソナラ
四十八頭	ヤソナラ

四十八願　シジュウハチガン、ヨイカタ、イナラ、ヨソナガ、ヨソナラ、ヨソハラ
四十四院　シジュウシイン、ツルシ、ツルス
四十塚　シジュウツカ
四十宮　シジュウミヤ
四十山　アイヤマ、ヨスヤマ、ヨソヤマ、ヨツヤマ
四十崎　アイザキ、ヨソザキ、ヨットザキ
四十川　アイカワ
四十日　シトカ
四十本　ヨソモト
四十栄　ヨソエ、ヨトエ
四十沢　アイザワ、ヨソザワ
四十物　アイモノ、アエモノ、アラモノ、ヨソモノ
四十物谷　アイモノヤ
四十萬　シジマ、シズマ、シンマ、ヨスマ
四十谷　シシタニ、ヨソタニ
四十願　ヨソケタ
四千萬　ヨチマ
四反田　シソリダ、シタンダ
四品　シホン
四坂　シサカ
四坊　シボウ
四塚　ヨツズカ
四天皇　シテンノウ
四夷　シイ、ヨツイ
四宅　ヨツヤ
四宮　シノミヤ、シミヤ、ヨツミヤ
四宮田　シキュウダ、シグタ
四家　アイミエ、アミイエ、シウチ、シカ、シケ、ヨツイエ、ヨツヤ
四富　シトミ、シドミ、ヨトミ
四尾　シオ
四居　シイ、ヨツイ
四屋　ヨツヤ
四岡　シオカ
四島　シシマ、シジマ
四川　ヨモカワ
四広　ヨツヒロ
四役　ヨツヤク
四御神　シノゴゼ
四思　シシ
四恩　シオン
四恩道　シオンドウ
四戸　シト、シド、シノエ、シノト、シノヘ
四戸岸　シトギシ、シドギシ
四手井　シテイ、シデイ、ヨテイ
四折　シオリ
四斗　シト
四斗辺　シトベ
四方　シオ、シカタ、シホウ、ヨカタ、ヨモ、ヨモノ
四方出　シオデ
四方堂　シホウドウ
四方天　シホウテン、シホウデン
四方寄　ヨモキ
四方山　シオヤマ、ヨモヤマ
四方津　シオツ、ヨモツ
四方田　シオタ、シオダ、シオデ、シホウデン、ヨカタ、ヨモタ、ヨモダ
四方路　ヨモジ

四日	ヨツカ、ヨツヒ
四日市	ヨツカイチ
四時堂	シジドウ
四月	ワタヌキ
四月一日	オタヌキ、シガツイチニチ、ツボミ、ワタヌ、ワタヌキ、ワタメ
四月咲	ツボミ
四月朔	ワタヌキ
四月朔日	ツボネ、ツボミ、ワタヌキ
四木	シキ、ヨツキ、ヨツギ
四本	シホン、シモト、ヨツモト、ヨモト
四本木	シホンギ
四本松	シホンマツ
四杉	シスギ、ヨスギ、ヨツスギ
四村	シムラ、ヨツムラ
四条	シジョウ、ヨジョウ
四松	ヨツマツ
四林	ヨツバヤシ
四柳	シヤナギ、シリュウ、ヨツヤナギ
四柴	シシバ
四栗	ヨツグリ
四條	シジョウ
四極	シハス、シハツ
四橋	ヨツハシ、ヨツバシ
四止	シシ、シト、シマ
四歩一	シブイチ
四比	シヒ
四水	シスイ
四沢	シザワ
四津	シズ、シツ、ヨツ
四津井	シズイ
四津口	シズグチ、ヨツグチ
四津田	ヨツダ
四津谷	ヨツヤ
四海	シカイ
四潟	ヨガタ
四瀬	ヨセ
四熊	シクマ
四牟田	シムタ
四王	シオウ
四王天	シオウテン、シオウデン、シノウテン
四田	シダ、ヨツダ
四登	シノボリ
四百刈	シヒャクガリ
四碇	ヨツイカリ
四礼	シレイ
四穂田	シホダ
四竈	シカマ、シガマ、シベシ、ヨツカマ
四童子	シドウシ
四纏	ヨツガネ
四脇	シワキ
四脚	ヨツアシ
四至内	シウチ、シキナイ、シキュウ、シシウチ、シジウチ、シジナイ、シマウ
四至本	シシモト、シジモト、ヨシモト
四茂野	シモノ、ヨモノ
四葉	シハ、シバ
四蔵	ヨツクラ
四藤	シトウ、ヨツフジ
四角	シカク、ヨスミ
四角目	シカクメ、ヨスミメ、ヨツミメ
四谷	ヨツタニ、ヨツヤ

四賀	シガ
四車	ヨツグルマ
四辻	ヨシズ、ヨツジ、ヨツツジ
四邑	シムラ
四郎	シロウ
四郎丸	シロマル
四郎園	シロウゾノ
四部	シベ
四野	シノ
四野宮	シノミヤ
四釜	シカマ、シガマ、ヨツカマ
四釣木	ヨツキ
四門	ヨツカド
四間丁	シケンチョウ
四間町	シケンチョウ、シママチ
四関	シセキ、シゼキ
四關	シセキ
四防	ヨツマツ
四阿	アオカ、アズマ、アズマヤ、シア
四馬田	シマタ、シマダ
四鬼	シキ
四鳥	シドリ
七村	ナナムラ
七条	シチジョウ、ヒチジョウ
七條	シチジョウ、ヒチジョウ
七里	シチザト、シチリ、ナナサト、ナナザト、ヒチリ
七山	シチヤマ、ナナヤマ
七野	シチノ、ナナツノ、ヒチノ
七丈	シチジョウ
七分	シチブ
七原	シチハラ、ナナハラ
七ケ所	シチカショ
七島	シチシマ、シチジマ、シチトウ、ナナシマ、ヒチトウ
七谷	シチタニ、ナナタニ
七軒	シチケン
七郷	シチゴウ、ヒチカワ
九反田	クタンダ
九俵	クヒョウ
九個	クコ
九原	クハラ、クバラ
九村	クムラ
九条	クジョウ
九條	クジョウ
九森	クモリ
九江	キュウコウ
九軒	クケン、クノキ
九郷	クゴウ
九里	クサト、クノリ、クリ

[1] ヨンについての記述で早いのは 1904 年（明治 37 年）に出版されたサトウと石橋の『英和口語辞典（第 3 版）』で four の項目中にある“yo[sometimes yon]”という記述である。第 2 版（1879 年、明治 12 年）まではこの記述は入っていないので、明治後期からヨの代わりにヨンが使われ出したものと思われる。ヨの代わりということは、当初ヨンが使われたのは、単独の数詞としての使

い方ではなく、助数詞と使われて、たとえば、ヨバンの代わりにヨンバンを使うというようなことだったかもしれない。

[2] アストン（1869）にすでに同一語形が掲載されている。

[3] 今尾（2004）に丁目地名についての様々な情報がまとめられている。丁目というのは、本来、「通りに沿って細長」い町だったとして、銀座の絵図から家の間口との関係を確認するなど、興味深い内容がある。全国ではじめて丁目が使われたのは永正 16 年（1519）の甲府だと推定した内務省出身の小栗忠七氏の説なども紹介されている。

[4] 内務省の依頼による手書きの報告資料であるが、内務省地理局編纂物刊行会編（1986）に収録されている。

[5] 現在の七間町は単独の町名で、丁目はない。

[6] 「死」への連想からシニン（四人）やシバン（四番）が避けられたと説明されることがある。

[7] 番町地名にも発音表記が付いていない場合もある。たとえば、静岡市の七番町には発音表記は付けられていない。

[8] 完全とは言えないもので、静岡県全域の小字が収録されているわけではないし、多くの小字には読みがない。また、現存の小字と廃止された小字の区別もない。

[9] ルビには小文字を使用しない場合が多く、「シヨンタンダ」と書かれていたため正確な読みが分からなくなっている。

[10] 郵便番号簿ではツは促音ではないが、ネット上では「シジュッコク」の表記も見られる。

[11] ただし、「四番」を含む地名に黒石市上十川の小字に「大野四番」「北原四番」「留岡四番」があるが、ヨンバンと発音されている。また、十和田市に西四番町（ニシヨンバンチョウ）がある。「七番」についても、「大野七番」（黒石市上十川）があるが、シチバンとよむ。

[12] 『地名の語源』（鏡味完二／鏡味明克著）に現地呼称が異なっていた例として、他に、熱海の初島（ハシマ→ハツシマ）、富士五湖の西湖（ニシノウミ→サイコ）などの例があげられている（p.283）。

[13] 『地名の語源』、p.286。

[14] 『地名の語源』、p.352。

[15] 他に「七和」「七箇」「七合」「七会」「四箇」「四ケ所」なども合併地名だったようだ。青森県北津軽郡の「七和（ななわ）」も明治 22 年に 7 村合併してい

るが、三重県員弁郡の「七和（ななわ）」は同じ年に6村合併している。

[16] 『角川日本地名大辞典　静岡県』から読みのある小字名を取り出した。表記は元の通りとしたので、「ヨトーリダ」と「ヨトオリダ」があるが、異なる発音かどうかは不明である。小字名は廃止されたものもあり、過去の発音を示している場合もある。リストは漢字表記のままパソコンのコード順に並べてある。

【追記】

『NHK ことばのハンドブック』の第2版が2005年に出ていたことを脱稿後に知った。筆者の知る限り、現代の数詞の読み方について詳しい基準を出しているのは、同じ NHK の『日本語発音アクセント辞典』とこの本ぐらいである。放送の基準として使われるという点でも日本語の現在と将来に対して重要な影響力を持つものである。最近の言語変化が反映されているものと考えたが、「数字の発音・用例集」を見てみると、表が拡張され、以前は10までだったものが20まで示され、さらに、たとえば100匹や1,000匹や10,000匹でヒキの発音がどのように変わるかなども示されるようになったのが最大の変更点で、10までの数詞については、個々の助数詞との組み合わせでどの数詞を使い、どのように発音するかという点では、基本的には、以前の規範を追認したものとなっている。「現代の日常会話で普通に使われている発音を尊重」（p.331）と書いてはあるが、最近の日本語の変化に敏感に反応しているわけではないようである。ヨン・ナナ・キューについても、ヨクチ（四口）しか認めていなかったものにヨンクチも容認するとした例がわずかに見つかるが、ほとんど変更点はないようである。ナナニン（七人）もキューリ（九里）も認めていない。本稿の本文で扱ったサンキレ（「三切れ」）についても、大学生世代のほとんどが今日サンキレを使うようであるが、相変わらず、ミキレしか認めていない。サンキレは容認形としてもあげられていない。